黙 33

配信日:2015/05/01

黙示録 13 章 1 節―2 節　スタディーガイド

黙示録 13 章 1 節

また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。

また私は見た。海から一匹の獣が上って来た＝地中海です。

■ダニエル書 7 章で、ダニエルに 4 つの幻が与えられ
地中海から現れた 4 匹の獣が現れました■

1. 第一の獣は、獅子のようで、バビロン帝国の預言を語っていました。
2. 第二の獣は、熊に似ており、メディアとペルシャの帝国の預言を語っていました。
3. 第三の獣は、ひょうに似ており、ギリシャ帝国の預言を語っていました。
4. 第四の獣は、この世の動物に当てはめることができない 7 つの頭と 10 本の角を持っている大変恐ろしい獣で、ローマ帝国と終末の支配国の預言を語っていました。

これらはすべて、地中海付近を支配した国々です。

十本の角と七つの頭とがあった＝竜であるサタンにそっくりです。

サタンは 7 つの冠をかぶっていましたが､獣である反キリストは｢その角には十の冠があり｣と、冠の数が異なることが記されています。

黙示録 13 章 2 節

私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。

私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようであった＝ダニエル書 7 章に出てくる 4 匹の獣すべてに似ています。

7 つの頭と 10 本の角を持つ獣はローマを表し、ひょうはギリシャ、熊はメディアとペルシャ、獅子はバビロンです。どれもイスラエルを圧迫し苦しめた国々です。

黙示録 13 章の獣は、イスラエルの国を苦しめた国々の性格を持つ獣です。

■神学者の多くが、7 つの頭を、7 人のローマ皇帝と考えています■

1. ユリウス
2. アウグストゥス
3. ティベリウス
4. ネロ
5. クラウディウス
6. ウェスパシアヌス
7. ティトゥス

■別の神学者の中には、紀元前 753 年からのローマの政情の変動であると考える人々もいます■

1. ローマの王政時代
2. 貴族共和政時代
3. 民主共和政時代
4. 元首政時代
5. 専制君主政時代
6. 東西分裂時代の 7 つを数え、最後の東西分裂時代が現在も続いているという考え。
7. 終末の統一政治時代

■12 章で解説したように、聖書の中で、竜の 7 つの頭と 7 つの冠は■

1. エジプト
2. アッシリヤ
3. バビロン
4. メディアとペルシャ
5. ギリシャ
6. ローマ
7. 終末の合併国

10 本の角と 10 個の冠は、終末に合併する国々の王のことであると 12 章で解説しました。

竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた＝竜であるサタンは、自分が王であり神でありたいという、高ぶりと偽りに満ちた者です。

竜が「自分の力と位と大きな権威を与えた」という、サタンにそっくりなこの反キリストは何者なのでしょうか。
メシアニック・ジュー（イエスをメシアと信じているユダヤ人）の神学者の考えは、創世記のみことばに関連付けられています。

創世記 3 章 15 節

わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく。

わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く＝「女の子孫」ということばが出てきますが、子孫はいつも男性を通して語られます。

聖書の中で女の子孫ということばが出てくるのはこの箇所と、竜が女の子孫を追いかける、という黙示録 12 章 17 節の 2 箇所だけです。

クリスチャンは、女の子孫が男の精子なしで聖霊様によって身ごもったイエス様であることを知っています。

この女の子孫であるイエス様が、「サタンの頭を踏み砕く」と預言されています。
それゆえに、この創世記 3 章 15 節は「最初の福音」と言われています。

おまえの子孫と女の子孫の間に＝「おまえの子孫」ということばに注目しましょう。
原文で、「〇〇と〇〇」というのは、同等を表しています。

「A と B」はどちらもアルファベットで、「1 と 2」はどちらも数字です。それと同様に、「女の子孫」から奇跡的に男の子が産まれたのなら、「おまえの子孫」も奇跡的な形で男の子を産むという意味になります。

神様がこの預言を語られた 2 千年後にアブラハムが選ばれ、その 2 千年後に女の子孫であるイエス様がお生まれになりました。

ユダヤ人神学者曰く、この預言を恐れたサタンが、女の子孫が現れないようにと創世記 6 章で堕天使を送った、ということです。

創世記 6 章 1 節－2 節

さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。

2 節「神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。」＝「神の子ら」は、ヨブ記の 1 章と 2 章を読むと天使たちであることが分かります。

そしてそれは、サタンが送った堕天使たちであるという考えです。

「天使は子どもをつくることができない」という考えがありますが、創世記 3 章 15 節で、「おまえの子孫」ということばを神様が使われています。子孫ということばは、血のつながりを表します。

創世記 6 章 4 節

神の子らが、人の娘たちのところに入り、彼らに子どもができたころ、またその後にも、ネフィリムが地上にいた。これらは、昔の勇士であり、名のある者たちであった。

堕天使と人間の娘たちの間にできた子どもは、勇士たちであるネフィリムです。

ロバと馬を掛け合わせて生まれた動物のラバは、子種が無いのでラバ同士で子どもを作ることができません。

堕天使と人間の娘の間には、勇士たちである男性しか生まれていない様子です。
女の子孫をなくすには、最も良い方法です。

この時、神様は、このような状況に関わっていなかったノアの家族を聖別して、世界を洪水によって破壊し、再び人類が始まったと考えます。

ユダの手紙 1 章 6 節

また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。

自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました＝「天の使い」である領域を守らず、人間の世界に入り込んだ御使いたちを、永遠の束縛を持って暗闇の牢に閉じ込められたと考えられます。

これは、ノアの時代の堕天使たちで、このようなことは再び許されなくなったと考えられています。

民数記 13 章 33 節で、約束の地を視察した 12 人のうち 10 人が、あの地にはネフィリム人が住んでいたと報告しました。

しかし、ヨシュアと共に約束の地に入ったイスラエル人は、ただの一度もネフィリム人に出会っていません。ですからそれは、うその報告であったことが分かります。

終末にもう一度起こる出来事が、「おまえの子孫」と言われたサタンの子孫が生まれることです。
そして、その子が「反キリスト」である、という説がユダヤ人神学者により語られています。